

## 言語社会研究科 博士審査要旨

論文提出者 松木 栄三  
論文題目 ロシア中世都市の政治世界 ―都市国家ノヴゴロドの群像―  
論文審査委員 坂内徳明教授、土肥恒之教授、大月康弘助教授

### 1. 論文の構成

都市ノヴゴロドは、9世紀に始まる「ロシア史」のなかで、魅力的で特異な地位を占めている。字義通りには「新しい町」という名のこの都市は、実際にはロシアでもっとも古い、由緒ある町である。伝説によれば、リューリックが招かれて初めて「ロシア」社会が築かれたのはまさにこの町だったし、リューリックの子孫が10世紀末に新都キエフに移ってロシア世界の中心が移動した後にも、ノヴゴロドは第2の都市として重要な古都であり続けた。

この都市が「ロシア史」のなかで特異な存在であるのは、12世紀後半以降にキエフの内紛によってその支配から比較的自由になったとき、他のロシア人都市がなお「公」によって統治されたのに対し、むしろ突出した「公」の支配を許さず、独特な貴族共和制的政治体制を発達させていった点にある。たしかにこの町にも「公」(クニャージ)はなお存在した。しかし、共和制国家ノヴゴロドの政治運営は、「貴族」(ボヤーリン)、「大主教」(アルヒエピスコプ)など都市貴頭者たちの政治参与によって規制され、協働された。

本論文は、この12世紀前半から15世紀後半までのおよそ300年間にわたる中世ノヴゴロド国家の政治世界を、そこに登場する主要なアクターである「公」「貴族」「大主教」に照準を合わせて分析した研究成果である。

その構成は以下の5章からなる。

- 第1章 絵師グレチン
- 第2章 公アレクサンドルとその一族
- 第3章 大主教ワシーリイ・カレカ
- 第4章 貴族オンツィフォルの一族
- 第5章 「女市長」マルファ

### 2. 本論文の概要

全5章とも、都市国家ノヴゴロドの政治運営を考える上で重要な人物や家族を事例的に取り上げている。そして、彼らに関与した都市政治の実態と形態、それを支えた都市社会の構造について分析を加えている。しかし、本論文は、都市ノヴゴロド内の政治の展開、国家制度の分析のみを目標としているのではない。当該期の都市の現実を将来した対外的

要因にも注意が向けられるのが、本論文のもう一つの特長である。公、貴族、大主教たちが、モンゴルや、ビザンツ、モスクワ、ドイツ騎士団、ハンザ、リトアニアなど周辺世界といかなる繋がりをもって生きたのか。本論文は、当時の国際関係のなかに彼ら個人や家族の歴史を描き出すことによって、都市国家ノヴゴロドの政治、経済、社会の位相を、ビザンツ、西欧、イスラム社会を基軸とした国際関係のなかに位置付けようとする。

第1章「絵師グレチン」は、ギリシア人イコン絵師グレチンの生涯と活動を再構成し、彼が活躍した12-13世紀のノヴゴロドをビザンツとの密接な結び付きのなかに考察する。

「グレチン」Grechinなる名をもつ聖職者は、ノヴゴロド年代記中の記事に数度観察される。大主教候補に推されたグレチン、ユーリエフ修道院のアルキマンドリト（掌院）に就任したグレチン、あるいはまた、クレムリン城門教会壁画の作成者であるグレチン、等々。研究史は、彼ら「グレチン」の実体を究明し、彼らの同定作業を行ってきた。そこでは、ノヴゴロド年代記ばかりでなく、1951年に発見された白樺文書から知られる情報が多大な貢献をもたらした。白樺文書については、長らく発掘調査に従事して指導的地位にあるV・L・ヤーニン氏による優れた概説書が、松木氏と三浦清美氏の共訳によって出版されている（『白樺の手紙を送りました——ロシア中世都市の歴史と日常生活』山川出版社、2001年）。この考古学的発掘の成果がもたらした諸事実から、当時のノヴゴロドに多数の「グレチン」が存在したことが確認された。

「グレチン」なる言葉は、一般的に「ギリシア人」Grekを意味する。このことが、人物の同定作業を困難にさせた。教会史家ゴルビンスキーによれば、同用語は、具体的な人物を特定する人名ではなく、単なる「ギリシア人」というエトノスを指し示す言葉と理解される。ゴルビンスキーによれば、12世紀末のノヴゴロドでは、聖界の要職にギリシア人聖職者を推す「親ギリシア派」と、スラヴ人出身の主教を確保しようとする「スラヴ民族派」の対立が存在した、という。松木氏は、ゴルビンスキーによるこの図式的理解の一面性を指摘しつつ、なお可能性が残された個別「グレチン」の再構成作業を試みる。そうするなかで松木氏は、ノヴゴロド社会が「ギリシア」（＝ビザンツ）ともった国際的關係性について考察を及ぼした。

イギリスのビザンツ史家オボレンスキーは、ビザンツ帝国からギリシア正教をはじめとする伝統文化を受け継いだ中世東欧諸国の世界と、その国際的結び付きを「ビザンツ共同体」Byzantine Commonwealthと名付けて概念化した。都市ノヴゴロドは、この「ビザンツ共同体」のなかでその最北辺に位置した。ノヴゴロドは、すでに12世紀前半以来、キエフ公権力から自立した独立の都市国家として成長してきていたが、その自立性を確実なものとするためには、キエフ公という世俗支配権からの自由ばかりでなく、キエフ府主教からの相対的自由を確保する必要が求められた。それは、「独立教会」autocephaliaの地位を獲得する、という課題を意味していた。1156年以来、ノヴゴロドは、ノヴゴロドの聖職者のなかから選挙で自分たちの主教を選ぶ権利を確保し、まさに1165年に、ノヴゴロド主教を「大主教」に格上げする公式の認定をキエフ府主教から獲得する。ゴルビンスキーと松木氏によれば、12世紀における「大主教」位は、単なる名目的称号ではなく、府主教にではなく、直接「総主教」に従属する位階として位置付けられていたという。つまり、ノヴゴロド教会は、直接コンスタンティノーブル総主教に従属する「独立教会」として自らを位置付け

ることができるようになった、というわけである。このことは、都市ノヴゴロドを「ロシア世界」のなかで相対的に高める役割を担ったはずであった。

第1章での議論は、こうして、かかる政治的推移に対応するものとして、ノヴゴロドの教会人がビザンツの帝都に足繁く通う動機が生じたことへと推論される。12-15世紀の「ロシア人」旅行家による聖地巡礼記のもっとも多くがノヴゴロド人によるものであることは、事態を雄弁に物語っているという。

例えば、貴族か大商人の息子であったドヴレイニャ・ヤドレイコヴィチという人物が、第4回十字軍によって陥落する直前のコンスタンティノープル「巡礼」に出掛け、現存するものとしては2番目に古い巡礼記を残した。ドヴレイニャは、帰国すると剃髪を受け、修道僧アントーニイとなる。ノヴゴロド第一年代記に見られる記事によれば、彼は「コンスタンティノープルから聖墓（キリストの墓の設計図ないしレプリカ）をもって帰国していた。彼はフーチンの聖救世主修道院で剃髪した。ムスチフラフ公ほかすべてのノヴゴロド人も彼を愛するようになり、叙任のためにルーシ（キエフ）に彼を派遣した。彼は、アントーニイの名で大主教に叙任されて帰国した」。

松木氏によれば、このアントーニイの「大主教」選出という事実は、ノヴゴロドが「ビザンツ帝国の正教的伝統を正確に学び、これをノヴゴロドのなかに再現するという業績がその人物を大主教にするほどの政治的重要性をもっていた」ことを示すという。少なからぬ人数の「グレチン」が存在したこと。その痕跡もまた、かかるアントーニイのような人物を輩出する母胎としてのギリシア人帰化集団、あるいはノヴゴロドにおける親ギリシア（＝ビザンツ）集団の存在を示し、併せてその政治的重要性を示唆していた。

第2章「公アレクサンドルとその一族」は、都市国家ノヴゴロドにおいても決して存在を止めることがなかった「公」の機能と性格について考察する。「公」は、中世ロシア世界において重要な存在だった。それは、共和制的な政治的システムを発展させたノヴゴロドにあっても、最後まで排除されなかった存在だった。その理由として松木氏は、公が「キエフ国家の分解後に成立した諸国間の政治的秩序、つまり「ルーシ」というオイクメネーをつなぐ重要な政治的媒介者」だったと指摘する。ルーシ世界の一員として生きるためには、公の存在を完全に排除するわけにはいかなかったと考えられるのである。しかし、前述のように、12世紀以降のノヴゴロド公は、キエフなどに見られるような特権的支配者ではありえなかった。本章では、13世紀前半にほぼ確立されるノヴゴロドの共和制的政治体制における公の機能の推移を、とりわけ13世紀後半に登場するアレクサンドル・ネフスキーとその父ヤロスラフの時代に焦点を合わせて展望する。

ノヴゴロドでは、12世紀以来、民会の選挙で市民から選ばれる市長や千人長などの官職者が、「共和制」的な都市政治を展開していた。キエフ時代に「君主」として君臨していたリュウリックの血を引く公の政治的比重は、相対的に小さくなっていった。ノヴゴロドには、リュウリックの血統の支配集団つまり公身分の一族が定着しなかったから、都市政府は他国に住む公の一族から適切な人物を選んで「公」として招致した。このノヴゴロド公は、軍事・裁判機能を果たす一種の傭兵隊長的存在として受け入れられたという。1136年には、都市側側に有利な制度、いわゆる「公選定の自由」の権利が確立していた。

1136年は、10世紀以来の伝統的なキエフ大公の支配が最終的に脆弱化し、ノヴゴロドが

独自に公を選定する権利を確保した年だった。10-11世紀のノヴゴロド公は、キエフ大公の意志で送り込まれてくる大公一族の成員（多くは大公の長男）だった。この体制下でのノヴゴロド公は、キエフ大公の権威を体現する君主的存在だった。しかし、12世紀になるとキエフ大公権は目に見えて衰退する。大公権の復権を図った最後のキエフ大公ウラジーミル・モノマフ（在位1113-1125年）が1125年に没し、後継の長男ムスチスラフも1132年に亡くなると、都市ノヴゴロドは、15世紀末まで続くことになる「共和制」的政治体制を次々と敷いていくことになった。やはりキエフから派遣されていた「市長官」を自分たちの手で選出し、この役職をノヴゴロド貴族から選ぶようになった。1156年には、都市の宗教的最高権威であるノヴゴロド主教（1162年以降は大主教に昇格）もまた、キエフ府主教の任命から市民による選挙制に移行した。

12-13世紀初頭のノヴゴロドの民会は、周辺3公国から自分たちの公を迎え入れていた。その際、市民は「公との契約状」と取り交わし、公とその家族たちが「ノヴゴロド領内で土地や従属民を集積し、土地領主化したり土着化したりすることを妨げよう」とした。伝承される文書は、1260年のものを嚆矢として15世紀末に至るまでおよそ30通あるが、現存する文書以前にもすでにこの「契約」は施行されていた。

本章の主眼は、ノヴゴロド政治史における以上のような共和制的体制の成立と展開とならんで、この共和制的体制からは例外的現象と見えるほど長期にわたってこの都市に滞在し、深く市政に関与したアレクサンドル・ネフスキー（在位1252-63年）の事績とその歴史的背景の分析に置かれている。

ノヴゴロドにとって、リューリックの血統に連なる「公」は、前述のようにルーシ世界の一員であるために必要な存在だった。13世紀前半、ルーシ世界の中心の一つはウラジーミル＝スズダリ公国にあり、ノヴゴロドも次第にこの公国より公を迎え入れることが多くなっていた。ところが、アレクサンドルの父ヤロスラフが、ウラジーミル＝スズダリ公国からノヴゴロド公として迎えられた1223年に、モンゴル軍がロシア南部に初めて到来し、1238-40年には、本格的なロシア征服が行われるに至る。ウラジーミル＝スズダリ公国の公一族たちはモンゴル軍の前に壊滅し、これを受けてヤロスラフは、18歳になっていた息子アレクサンドルをノヴゴロド公として残し、荒廃したウラジーミル市に戻っていった。ヤロスラフ、またアレクサンドルが「公」として存続するためには、キプチャク汗国の本営サライに伺候して汗に忠誠を誓わなければならなかった。ノヴゴロドもまた、この国際情勢に従わざるをえなかった。

ノヴゴロド公アレクサンドルが展開したルーシ世界とモンゴル族との駆け引きは、主要史料である『ノヴゴロド第一年代記』や『アレクサンドル・ネフスキー伝』から知られる。しかし、その事実展開の再構成は、これら史料が含む政治的イデオロギーについての批判的検討なしにはありえない。通常、「ネワ川の戦い」によりスウェーデン、ドイツ、デンマークからなるカトリック勢力の撃退したことが、アレクサンドルの輝かしい事績とされる。しかし、事件を伝える史料に含まれる後代の政治的意図を丁寧に解きほぐさなければならぬ。現代のロシア学界の諸説を批判的に検証しながら展開される叙述は、歴史学の魅力と可能性を十分に伝えている。

当時、ノヴゴロドと緊密な関係にあったビザンツの皇帝は、1204年以降帝都を第4回十字軍に占領されてニケーアに落ち延びており、ルーシ世界における正教世界の結び付きは、

それ自体危機に瀕していた。西方からのカトリック勢力の伸張を食い止めるために、アレクサンドルの戦勝は、モンゴルの宗主権下にあったものとはいえ、大きな歴史的意味をもった。アレクサンドルの死後（1263年）、ノヴゴロド公は彼の血縁者であるウラジーミル大公が兼ねるようになる。このウラジーミル大公の「擬制的「宗主権」体制は、ノヴゴロドの自由をいっそう拡大する側面をもっていた」。

第3章「大主教ワシーリイ・カレカ」は、14世紀に登場したワシーリイに即して、民会により選出された大主教が都市国家ノヴゴロドで果たしていた役割と、都市制度上での位相について検討する。

ノヴゴロドでは、大主教が都市政治の運営に深く関わっていた。ワシーリイもまた、外交および都市財政に基づく各種建設活動に深く関与した。ワシーリイの活躍は、当時勢力を伸ばしていた西方のリトアニア、またその西方に広がるカトリック世界と、キエフおよびコンスタンティノープルを中心とする正教世界との狭間で活動を展開したが、一連の考察の結果、ワシーリイを親モスクワないし親リトアニアのいずれかに色分けするのは誤りという結論が導かれる。彼の政治行動は、常に一方の側に負担するというものではなく、対立する二つの勢力を巧みに利用した、現実的な政治感覚と柔軟さを兼ね備えていた。

ワシーリイは、都市財政や聖ソフィア教会の財源を用いて、教会建設をも盛んに行った。ノヴゴロドのシンボルである聖ソフィア聖堂の整備、クレムリン城壁、またヴォルホフ大橋など、社会基盤、商業基盤となる各種建設事業を行った。

ノヴゴロド大主教は、キエフ府主教から叙任される習わしだった。しかし、それへの従属を好まなかったノヴゴロド政府は、直接コンスタンティノープルとの関係を求めた。ノヴゴロド人は、12世紀以来再三コンスタンティノープル総主教のもとを訪れた。14世紀に始まる白頭巾伝説もまた、そうした外交努力のなかから生まれたと紹介される。ノヴゴロドの巡礼記がコンスタンティノープルの「聖都」性を強調するのも、モスクワを宗教的中心とする理念の否定を含意していた。

第4章「貴族オンツィフォルの一族」は、各種資料に痕跡を残す有力貴族、オンツィフォル家の8代にわたる活動を再構成する。この家門については、ノヴゴロド年代記、白樺文書、証書資料、土地台帳のほかに、ネレフスキー区の考古学調査により、13世紀末から15世紀後半までの170-180年間の同家の活動をヴィヴィドに窺い知ることができる。

この貴族家門の歴代当主は、多岐にわたる活動を行っていた。14-15世紀のノヴゴロドには全部で5区が存在したが、居住する街区の住民との緊密な関係のなかで、区民の支持によって市長職を他区と争った。居住区は、ノヴゴロドの政治を、軍事、外交、行政など基本的国家機能を分掌することで支えていたが、自己完結的な地域共同体でもあった区は、独自の財政、土地、区長、区民会、軍事組織、印章、守護聖人、修道院をもっていた。貴族オンツィフォル家は、こうした区の代表として市長担当者を輩出し、区内部では15ほどの屋敷と3つの教会をもって区民との共同体的生活を営んでいた。

本章での叙述は、ノヴゴロドの都市貴族の生活を余すところなく描いて、極めて興味深い。彼らの経済的基盤は、土地所有であったことが、土地台帳研究から知られる。他方、商業活動を立証する史料材料はない。松木氏は、各種史料から確認される彼らの所領経営

の細部についても当時の光景を彷彿とさせる筆致で描いている。荘園ドヴィナの支配の実態、そこで獲得されたリス毛皮などをハンザ貿易やヴォルガ経由の国際商業経路を通じて交易していたことが論じられる。

彼らの活動を特徴付ける1つの現象として、修道院建設が挙げられる。貴族による修道院建設は、都市ノヴゴロドにおいてしばしば見られた現象だった。修道院に帰属させられた財産は、寄進者である貴族の家産的土地所有の延長上にあり、建設者は寄進財産への一定の権利を留保した。これは、古代末期にキリスト教化したローマ帝国、またその後継としてのビザンツでの現象と基本的に同一のものであった。

第5章「女市長」マルファ」は、共和制末期にノヴゴロド政治をリードした反モスクワ派の代表者ヴォレツキー家の女当主マルファの事績を追跡し、最終期のノヴゴロドとモスクワの政治的葛藤を辿る。15世紀のノヴゴロドで活躍したヴォレツキー家は、モスクワの政治的野望に対して、ノヴゴロドの矜持を示した。ノヴゴロドでは、親モスクワ派と親リトアニア派が争っていたが、最終的に西方カトリック世界のリトアニア大公に宗主権を認める代わりに軍事的援助を得る約束をしたリトアニア派が政権を握った。しかし、1477年春、モスクワ大公イワンがノヴゴロドを大軍で攻囲、ノヴゴロドは戦わずして降伏した。ここに、ノヴゴロドの民会は解散し、市長制も廃止されて、伝統ある共和制体制は廃絶された。モスクワ政府は、ノヴゴロドの貴族、有産市民、修道院、大主教から都市を没収、家族をノヴゴロドから排除して、モスクワの住民と入れ替えた。ここに、中世ロシアの特異な存在として魅力を放ったノヴゴロドの独自の歴史は幕を閉じた。

### 3. 論文の成果と問題点

以上のような多岐にわたる論点を含む本論文がもたらした学術的貢献は、大きい。以下にその大綱を再言しておこう。

(1) ノヴゴロド史は、キエフからモスクワに至る「ロシア史」のいわば中継点として、きわめて重要な一環をなしている。本論文は、その本格的研究の成果であり、わが国の研究史上で画期的な出来事である。

(2) 本論文は、ノヴゴロド社会における「貴族」「大主教／聖職者」「市民」といった社会的実在を抽出し、その関係性を分析することで、この社会の政治構造、社会構造を見事に浮き上がらせた。その功績は、歴史社会分析法の観点からも注目される。都市ノヴゴロド内での社会実体を弁別する作業そのもののなかに、歴史社会分析の醍醐味が十分に示されている。

(3) 都市ノヴゴロドは、ビザンツ、モンゴル、ハンザ、リトアニア、のちにはモスクワといった、周辺の諸国家、諸文明との交渉のなかに存在した。本論文が、各期の国際関係を都市国家ノヴゴロドの政治世界を中心にして描き出したことは、大きく評価される。この点でも、本論文は極めて大きな学術的意義を有しているといえる。

(4) 本論文は、各社会階層の典型的な人物を取り上げ、300年にわたるノヴゴロド史を再構成した。しかし、本論文の魅力は、分析・叙述がいわゆる人物伝に留まることなく、ノ

ヴゴロドの国家・社会構造を周到な目配りのもと全体として記述した点にある。この視点の取り方と、関連項目への周到な配慮は、歴史研究の魅力を十二分に伝えているといつてよい。

(5) 本論文で用いられた史資料は、ノヴゴロド年代記や白樺文書のほかに、商業文書、裁判文書、聖者伝等多岐にわたる。分析で依拠されたこれら史料群についても、本論文は周到で適切な紹介を施している。ここで展開された史料論は、ひとりノヴゴロド社会分析に留まらず、広く歴史社会分析一般についても、示唆するところが大きい。

本論文での分析が、関連史料の網羅的検討に依拠していることは言うまでもない。しかし、本論文の特長は、その精緻な史料操作にあるばかりではない。それは、分析の成果をヴィヴィッドな歴史叙述にまで昇華させ、ひとつの魅力的な歴史作品に仕上げた点でもまた光彩を放っている。叙述対象が、これまでわが国では見られなかった中世ロシア都市ノヴゴロドであるという点にとどまらず、周到な構成のもとで行われた記述は、歴史研究、社会分析を構想する上で一つの手本になるにちがいない。

ただし、本論文にも要望すべき諸点がないわけではない。ノヴゴロドの政治世界を、それを構成する「公」「貴族」「大主教」といった社会存在によって事例的に再構成する課題を立てたために、論点が広範にわたり、その分、実証性の点で各論点間に濃淡が生じたことは否めないし、都市の対外関係の一端を交易活動に求める場合、商業民の実体分析、またとりわけハンザとの関係が論点とされていないのは、残念と言わざるをえない。また、「中世都市」という学術用語で連想する「西欧中世都市」と、このノヴゴロドでは、都市の制度も社会成員の存在態様も同一ではなかったと判断される。それにもかかわらず、同用語を適用する戦略的意義について積極的説明が見受けられない点も、気になった。

しかしながら、以上に指摘した難点が存するとは言え、それでもなお、本論文が有する学術的貢献はいささかも損なわれるものではない。本論文がもたらした貢献は、長くロシア社会研究、西洋社会研究の歴史のなかに記憶されるにちがいない。

#### 4. 結論

審査委員一同は、論文審査の後に、平成 15 年 12 月 1 日に、学位論文提出者・松木栄三氏についての最終試験を行った。この最終面接試験においては、審査委員が本提出論文に関して、逐一疑問点を呈し、回答を求めるかたちで実施された。松木氏は、これらの諸点のすべてに明快な説明を与え、さらには今後の自身の研究課題への展望を示した。

他方、本学学位規定第 4 条第 3 項に定める外国語および専攻学術に関する学力認定においても、松木栄三氏は十分な学力をもつことを証明した。

以上より、審査委員一同は、本論文が該当分野の研究に多大なる貢献を果たしたことを認め、松木栄三氏が一橋大学博士(学術)の学位を授与することが適当であると判断する。